

◎原 著

温泉療法が腰痛症患者のQOLに及ぼす効果

横井 正, 千田益生¹⁾, 濱田全紀¹⁾, 光延文裕, 保崎泰弘, 芦田耕三,
岩垣尚史, 永田拓也, 藤井 誠, 高田真吾, 谷崎勝朗, 井上 一²⁾

岡山大学三朝医療センター

岡山大学附属病院リハビリテーション部¹⁾岡山大学附属病院整形外科²⁾

要旨：近年QOLが重視されるようになってきている。MOS short form 36 health survey (以下SF-36と略す)は、国際的レベルでの基準とされるべく開発された非疾患特異的HRQOL尺度である。今回、我々は当院でリハビリテーションをうけている腰痛症患者を対象に温泉療法のQOLに対する効果をSF-36を用いて調べた。SF-36の8項目をそれぞれ算出し、温泉療法前後での比較を行った。PCSは41.1から43.8へ、MCSは49.1から51.0へ上昇したことより、身体・精神面ともに効果があると考えられた。

検索用語：SF-36, 生活の質, 腰痛症

Key words：SF-36, Quality of Life, Low back pain

目 的

温泉療法は最も古くから行われてきた物理療法であるが、学問的に検討が加えられたのは比較的近年のことである。温泉療法には温熱作用、物理作用、精神をリラックスさせる作用などが挙げられるが、現代社会において温泉療法が患者のQOLにどのように影響を及ぼすかを検討した。今回、我々は当院で温泉療法をうけている腰痛症患者を対象にQOL評価を行った。

対 象

当院入院患者10名に同意を得て行った。性別は男性7名、女性3名であった。平均年齢63.6歳(34~86歳)であった。平均治療期間は42.3日(9~59日)であった。疾患は腰椎椎間板症3名、

脊柱管狭窄症2名、腰椎迂り症1名、二分脊椎症1名であった(表1)。QOL尺度としてはSF-36を用いた。以上の10名にSF-36を用いて温泉療法前後でQOL調査を行った。また、客観的評価として温泉療法前後でSLRテストを比較した。

表1. 対 象

性別	男性7名 女性3名
平均年齢	63.6歳 (34~86歳)
平均治療期間	42.3日 (9~59日)
疾患	腰椎椎間板症3名 脊柱管狭窄症2名 腰椎迂り症 1名 二分脊椎症 1名

結果

SF-36の8項目をそれぞれ算出した。下位尺度素点を計算し、0点から100点までの範囲の下位尺度得点に変換した。身体機能は64.0から73.5へ、日常役割機能(身体)は45.0から47.5へ、身体の痛みは40.6から50.8へ、全体的健康感は50.4から58.4へ、活力は47.2から59.5へ上昇した。社会生活機能は73.8から71.3へ、日常役割機能(精神)は53.3から50.0へ低下した。心の健康は62.8から64.4へと上昇した(図1)。

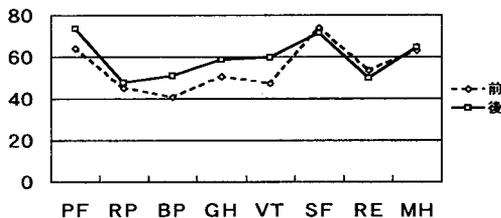


図1. 温泉療法前後のQOL

また、8つの下位尺度は、身体的健康を表すサマリースコア(PCS)および精神的健康を表すサマリースコア(MCS)の2つの因子にまとめ上げることができる。PCSにおいて非常に低いスコアは、自身へのケア、身体機能、社会機能に対して大きな制限をもっている、もしくは身体に強い痛み、倦怠を伴っているような状態を表している。MCSにおいて非常に低いスコアは頻回にわたる心理的な疲弊、心理的な問題による社会機能や役割機能の不全が著しい状態を表している。

今回の調査では50を基準値とするとPCSは平均41.1から43.8へ上昇し、MCSは平均49.1から51.0へ上昇した(表2)。

表2. 温泉療法前後のQOL

	療法前	療法後
PCS(身体的健康度)	41.1	43.8
MCS(精神的健康度)	49.1	51.0

また、SLRテストにおいて76.1度から83.6度に改善がみられた。

考察

温泉の作用として温熱作用、物理作用、化学薬理作用、転地作用などが挙げられる。

微温浴は身体に鎮静、鎮痛的に働く。また、浮力により身体が軽くなることにより、浴中運動が容易になる。化学薬理作用により保温効果をもたらす。そして、温泉地に一定期間滞在することによって体内リズムが修復、正常化され体調が整えられてくる。以上のような作用が総合的に働き腰痛を軽減するものと考えられる。

Constant Fらは慢性腰痛患者128人に温泉療法を行い、QOLが身体精神面において著明に改善したと報告している。岡本らは腰痛症患者12名を対象に温泉療法の臨床効果について検討を行い、治療前後で有意の改善がみられたとしている。

今回の検討では、社会生活機能、日常役割機能(精神)を除く6項目において上昇がみられたことより、温泉療法は効果があったと考えられる。また、PCSは41.1から43.8へ、MCSは49.1から51.0へ上昇したことより、温泉療法は身体・精神両面への効果があると考えられる。今後、ADL面に対する効果の検討等も行っていきたい。

まとめ

1. 温泉療法をうけた患者10名に対してSF-36を用いてQOL評価を行った。
2. 社会生活機能、日常役割機能(精神)を除く6項目において上昇がみられた。
3. PCSは41.1から43.8へ、MCSは49.1から51.0へ上昇したことより、身体・精神面ともに効果があると考えられた。

文献

1. 福原俊一, 黒川 清, 鈴嶋よしみ. SF-36 日本語マニュアル (ver. 1.2). (財) パブリック

ヘルスリサーチセンター。東京，2001年。

2. Constant F: Use of spa therapy to improve the quality of life of chronic low back pain p

atients. Med Care 36 (9): 1309-14, 1998.

3. 岡本 誠: 腰痛症に対する温泉療法の効果. 岡大三朝分院報告68: 51-58, 1997.

QOL in LBP patients

Tadashi Yokoi, Masuo Senda¹⁾,
Masanori Hamada¹⁾, Fumihiro Mitsunobu,
Yasuhiro Hosaki, Kozo Ashida,
Naofumi Iwagaki, Takuya Nagata,
Makoto Fujii, Shingo Takata, Yoshiro Tanizaki,
and hazime Inoue²⁾

Misasa Medical Center,
Department of Rehabilitation¹⁾,
Department of Orthopaedics²⁾,

Okayama University
Medical School

We have recently regarded the QOL as an important index in the treatment of disease. SF-36 is a measure of HRQOL made as an international standard. We investigated the QOL in LBP patients who underwent rehabilitation in our hospital using SF-36. We calculated PCS and MCS of SF-36. PCS went up from 41.1 to 43.6. MCS went up from 49.1 to 51.0. The spa therapy for LBP patients was effective.